

その他

スポーツ科学部3ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告 2020年度版  
 A report on students' self-evaluation of achieving three policies  
 at Nihon Fukushi University, Faculty of Sport Sciences, 2020

藤田 紀昭 安藤 佳代子 甲斐 久美代 竹村 瑞穂  
 Motoaki FUJITA, Kayoko ANDO, Kumiyo KAI, Mizuho TAKEMURA

日本福祉大学 スポーツ科学部  
 Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

I.はじめに

日本福祉大学スポーツ科学部（以降、本学部とする）は、すべての人々（国民）が生涯にわたって、健康であることを土台とした文化的な生活、活力ある生活、等しく生きがいを持った生活を営む共生社会を構築するために、文化としてのスポーツを多角的視点（人文・社会・自然科学等）から理解し、学校、地域、その他の場で、真摯に人と向き合い、よりよい関係を作り、スポーツの指導力、企画力、組

織力、問題解決能力を持って実践にあたることのできる人材を養成することを目的の一つとしている。つまり、本学部に所属する全ての学生が、競技スポーツや地域スポーツなどの多様な領域において、スポーツの意味や価値、社会的環境などを把握・理解し、創意工夫に基づく適切なプログラムを作成できる力を身につける。また、子どもから高齢者、障害者を含む、全ての人々に対応できる人材となること（設置の趣旨）を目指している。

表1 スポーツ科学部3ポリシーに基づく学生自己評価調査項目および選択肢

No	質問内容	1	2	3	4	実施時期
1	あなたは大学で学ぶための基礎的な学力を身につけてきたと思いますか？A1	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強く思う	入学時 実施
2	あなたはスポーツに関心があり、スポーツに関する知識を身につけ将来に生かしたいと思いませんか？A2	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強く思う	
3	あなたはスポーツや勉強で自分の可能性に挑戦し、自分を向上させたいと思いませんか？A3	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強く思う	
4	あなたは自分の言葉で意見や思いを表現し、相手に伝えることができますか？A4	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
5	あなたは仲間のことを理解したり、力を合わせて物事に取り組むことができますか？A5	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
6	あなたはスポーツを人文科学（倫理的視点や歴史的視点）、社会科学（社会学的視点やマネジメントの視点）、自然科学（生理学的視点、バイオメカニクスの視点など）多様な観点から説明することができますか？D1	全くできない	少しできる	できる	十分できる	入学時 1 2 3 年終了時 実施
7	あなたは実際にスポーツを行い、その楽しさや難しさを理解し説明することができますか？D2	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
8	あなたはスポーツがもたらす社会的な意味や価値、スポーツの力について理解し、説明することができますか？D3	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
9	あなたは幼児や大人、高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができますか？D4	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
10	あなたは人々のスポーツに対するニーズを理解したうえで、スポーツのやり方や楽しさ、スポーツの持つ様々な力や影響力を伝えることができますか？D5	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
11	あなたはスポーツ大会や教室などの企画や運営をすることができますか？D6	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
12	あなたは様々な社会事象や問題、疑問に思ったことに対して、それを深く知ろうとする気持ちがありますか？D7	全くない	少しある	ある	十分ある	
13	あなたは英語を使って自己紹介や会話をしたり、スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができますか？D8	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
14	あなたは様々な場面で困っている人を見たとき話を聞いたり、支援したりすることができますか？D9	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
15	あなたは様々な場面で人と関わり、その集団がうまく機能するよう働きかけたり、調整することができますか？（社会人に求められる力）	全くできない	少しできる	できる	十分できる	
16	あなたはスポーツ場面における体罰はある程度は仕方ないと思いますか？（体罰）	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
17	スポーツ科学部で身につけた力は自分の将来や仕事をいくうえで役立つと思いませんか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
18	スポーツ科学部の授業でスポーツを様々な視点から深く知ることができましたか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
19	スポーツ科学部の教員はあなたを丁寧に指導し、支援してくれたと思いませんか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
20	スポーツ科学部の教員はあなたの名前を憶えてくれましたか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
21	スポーツ科学部に入学して講義やゼミ、実習などに積極的に取り組むことができましたか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
22	スポーツ科学部に入学してよかったと思いませんか？	全くそうは思わない	思わない	思う	強く思う	
23	現在、大学の部活動・サークルに入っている	はい	いいえ			
24	これまでにオープンキャンパスや大学の学部事業（体力測定や講演会）など大学の行事にスタッフとして参加したことがある	はい		いいえ		

本学部では設置年度以来、学部アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく学生の自己評価に関する調査を実施し、毎年報告している。本報告はその2020年度版(4回目)の報告となる。調査は毎年、年度初めの4月に実施している。調査項目、および選択肢は表1に示すとおりで、5つのアドミッション・ポリシーに関する質問5項目(1年次のみ)、各ディプロマ・ポリシーに関する質問9項目及び、社会人スキルと体罰に関する項目(1から4年次)、その他の項目8項目である。学生は「全くそうは思わない(全くできない)」、「思わない(少しできる)」、「思う(できる)」、「強くそう思う(十分できる)」の中から一つを選択する。それぞれに1点から4点を付与し、平均を算出した。

今年度の報告では、アドミッション・ポリシーに関する5項目の1期生から4期生までの傾向、ディプロマ・ポリシーに関する9項目及び、社会人スキルと体罰に関する項目の自己評価ポイントの年次推移について報告する。

回答者数は表2に示すとおりである。2019年度の回答者数が著しく少なかったため、1期生の3年次および2期生の2年次の調査結果は参考値として示す。

表2 調査回答者数

	1年次	2年次	3年次	4年次
1期生(2017年入学)	191	178	12	105
2期生(2018年入学)	188	31	122	
3期生(2019年進学)	194	125		
4期生(2020年入学)	167			

## II. アドミッション・ポリシーに関して

図1は入学時のアドミッション・ポリシーに関する自己評価を示している。1期生から4期生全体の平均を見ると「基礎学力」に関するものが2.99、「スポーツに対する関心や身につけた力を社会で活かす」ことに関するものが3.76、「自己の可能性に挑戦する意志」に関するものが3.60、「自己表現と意思疎通」に関するものが2.86、「他者理解や仲間・集団作り」に関するものが3.42であった。「ス

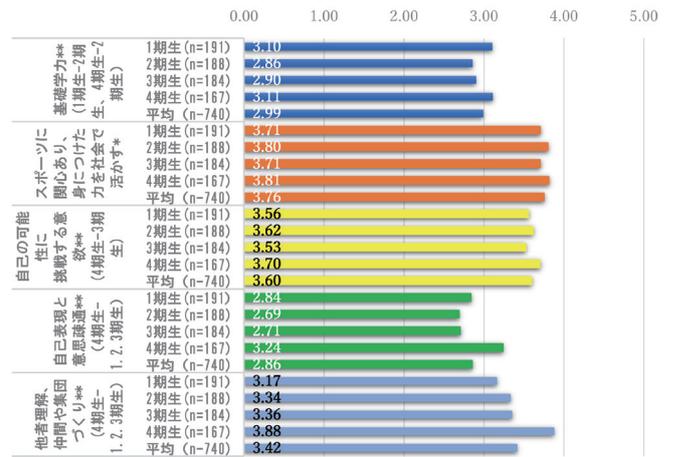


図1 入学時のアドミッション・ポリシーの自己評価(1~4期生)

ポーツに対する関心や身につけた力を社会で活かす」ことや「自己の可能性に挑戦する意志」については自己評価が高いが、「基礎学力」「自己表現と意思疎通」に関する項目が2点台と低い。基礎学力の向上とコミュニケーションスキルを身につけることが入学前および、入学後の課題と言える。また、全ての項目において2020年入学の4期生の自己評価が最も高くなっているのが特徴的である。

## III. ディプロマ・ポリシーに関する各項目の年次変化について

ディプロマ・ポリシーに関しては入学年度別に各学年における平均を算出し推移を示した。また対応のあるサンプルとして、入学年度に関係なく学年ごとにグループ化を行い、平均の比較も行ったが、先述の通り、2019年度における2年生と3年生のサンプル数が著しく少ないため考察の対象とはせず、結果を表に示すとどめる。

表3は本学部のディプロマ・ポリシーとそれに関わる科目配置(カリキュラムマップ)を示している。これをもとに各学年におけるディプロマ・ポリシーに関する自己評価の推移を考察する。なおこのカリキュラムマップは、授業とディプロマ・ポリシーの紐づけにやや改善の余地があると思われる。今後修正をかけていく必要があると思われる。

表3 本学部のディプロマ・ポリシーとそれに関わる科目配置（カリキュラムマップ）

ディプロマ・ポリシー	1年配当科目	2年配当科目	3年配当科目	4年配当科目
①スポーツ文化を多角的視点（人文・社会・自然科学的視点）から理解している。	スポーツ科学入門、スポーツ史、スポーツビジネス論、機能解剖学、認知心理学、健康管理概論、学校保健、健康管理概論、スポーツマネジメント、スポーツ統計学、スポーツと脳、スポーツ生理学、スポーツ心理学	知多半島のふくし、スポーツ医学、コーチング科学、トレーニング科学、メンタルトレーニング、	スポーツ政策・行政論、スポーツ法学、アスレティックリハビリテーション、健康運動特論Ⅰ、健康運動特論Ⅱ、健康運動特論Ⅲ、健康産業現場実習	スポーツ指導法演習（レク・ニュースポーツ）
②スポーツの楽しさを体験的に理解している。	スポーツ実技、専門実技（ダンス、野上A、陸上、バスケ）	スポーツ実習者論、専門実技（器械、水泳、バレー、柔道、AS、サッカー、バド、野上B）、スポーツ指導法演習（陸上、バスケ、水中水泳、ダンス）	障害者スポーツ指導法演習AB、専門実技（野上C、ソフト、テニス、卓球、剣道）、スポーツ指導法演習（バレー、サッカー、テニス、バド、卓球、エアロビ）	スポーツ指導法演習（ゴルフ、レク・ニュースポーツ）
③スポーツや運動の意味や価値について理解している。	スポーツ史、スポーツ文化論、野上スポーツ論、スポーツ社会学、ふくしスポーツ論、スポーツ哲学、スポーツ教育学、スポーツキャリア教育、	障害者スポーツ論、スポーツ論理学、身体表現・芸術表現論、スポーツ人権学、武道論、保健体育科教育Ⅰ	障害者スポーツ指導法演習AB、ふくしスポーツ演習、保健体育科教育法Ⅱ-ABCD、保健体育科教育法Ⅲ、教育実習ⅠB、健康運動特論Ⅰ、健康運動特論Ⅱ、健康運動特論Ⅲ	スポーツフィールドワークⅡ、教育実習ⅠB、教育実習ⅡB、教育実習ⅢB、教職実践演習
④人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている。	発達発達論、教職入門B	スポーツ栄養学、特別支援教育論、肢体不自由児教育論、スポーツバイオメカニクス、測定・評価、知的障害児教育論、知的障害児の心理、視覚・聴覚・病弱児論、教育原理B、教育と発達の心理学B、教育制度論B、教育課程論B、教育相談の基礎と方B、知的障害児の生理と病理、道徳教育の指導法B、教育方法論B、	スポーツコミュニケーション、レクリエーション理論、加齢学、肢体不自由児指導法、特別支援教育概論、総合的な学習の時間の指導法、知的障害児指導法、生徒・進路指導論B、発達障害児論、特支援教育課程論、特別活動方法論B、教育実習ⅠB	教育実習ⅠB、教育実習ⅡB、教育実習ⅢB、障害児教育実習Ⅰ、障害児教育実習Ⅱ、教職実践実習
⑤スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている。		スポーツフィールドワークⅠ		
⑥地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている。		スポーツ・運動指導者論、地域スポーツ論、	衛生・公衆衛生学、学校保健B、コンディショニング演習、健康産業現場実習	
⑦真実を見極める「知」への探求心を有している。	法入門、福祉社会入門、知多学、経路学、統計学、社会学、哲学、キャリア開発Ⅰ、日本福祉大学の歴史、地震と防災社会、日本国憲法、生理学、導入ゼミ	政治学、福祉の力、キャリア開発Ⅱ、経済学、ふくしと防災コミュニティ、知多半島のふくし、スポーツ科学演習、	生命と環境、肢体不自由児の心理、肢体不自由児の生理と病理、専門演習Ⅰ	専門演習Ⅱ、
⑧国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている。	フレッシュマンイングリッシュ、情報処理演習、海外フィールドワーク、スポーツキャリア教育	フレッシュマンイングリッシュ、文章作成力演習、	スポーツイングリッシュ、スポーツメディア論	
⑨他者と、スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている。	ここからたどる、視覚障害者支援論、ろう文化と手話、聴覚障害者の理解と支援、ふくしとフィールドワーク、日本語と文化Ⅰ、Ⅱ、ビジネススキル、	コミュニケーション力演習、スポーツジェンダー論、日本語と文化Ⅲ、Ⅳ	ふくしフィールドワーク実践、インターンシップ	インターンシップ

※各科目ともメインとなるDP（科目によっては複数）の欄に記載している

1. D1 「スポーツ文化を多角的視点（人文・社会・自然科学的視点）から理解している」について

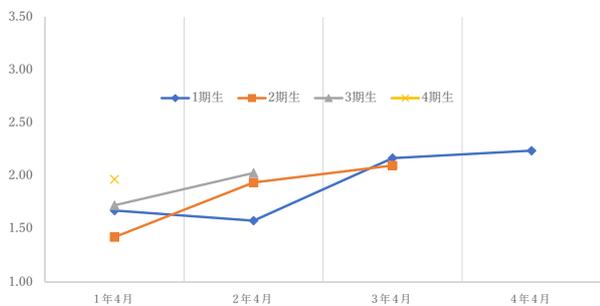


図2 D1 スポーツを多様な観点から説明できる

D1に関する質問は「あなたはスポーツを人文科学（倫理的視点や歴史的視点）、社会科学（社会学

的視点やマネジメントの視点）、自然科学（生理学的視点、バイオメカニクスの視点など）多様な観点から説明することができますか」というものである。図2は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。1期生の2年次に自己評価ポイントが下がる傾向が見られるが、その他においては自己評価が徐々に上がっている。学年を経るごとに様々な領域の授業を受けることになることから学生は年を経るにつれ、多様な観点からスポーツを学習し、それらについて説明する力を身につけているのではないかと推察される。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグループ化）の推移を表4に示した。

表4 DP1 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
	1年	2年	3年		4年				
D1 あなたは スポーツを多様な観点 から説明することができますか？	1年	1.67	0.73		2年	1.79	0.65	327	↑*
	1年	1.43	0.57		3年	2.10	0.57	134	↑**
	1年	1.66	0.80		4年	2.22	0.59	103	↑**
	2年	1.72	0.74		3年	2.16	0.55	25	↑*
	2年	1.65	0.59		4年	2.24	0.61	99	↑**
3年	2.20	0.79		4年	2.30	0.48	10	n.s.	

表5 DP2 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの 平均の推移	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
	1年	2年	3年		4年				
D2 あなたは実際にスポーツを を行い、その楽しさや 難しさを理解し説明する ことができますか？	1年	2.90	0.73		2年	2.80	0.73	323	↓*
	1年	2.83	0.76		3年	2.65	0.69	133	↓*
	1年	2.98	0.70		4年	3.00	0.70	102	n.s.
	2年	2.48	0.65		3年	2.52	0.59	25	n.s.
	2年	2.93	0.73		4年	2.99	0.69	99	n.s.
3年	2.40	0.52		4年	3.10	0.74	10	↑*	

2. D2 「スポーツの楽しさを体験的に理解している」について

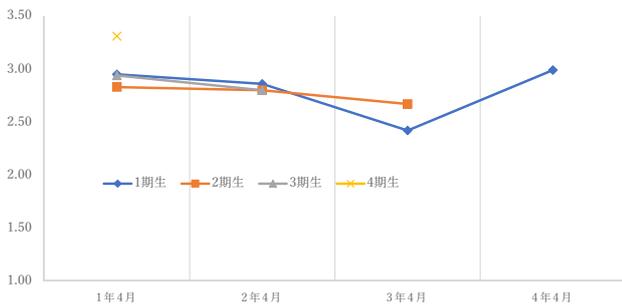


図3 D2 スポーツの楽しさを理解、説明できる

D2に関する質問は「あなたは実際にスポーツを行い、その楽しさや難しさを理解し説明することができますか」というものである。図3は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。1期生の3年次から4年次にかけて自己評価ポイントが上がっているものの、1期生、2期生、3期生のほとんどにおいて低下している。D2に関しては授業の満足度も低いということが明らかになっている。主としてD2に紐づけられるとされている科目はスポーツ実技、専門実技、スポーツ指導法演習など実技系の科目が多い。これらの科目は一クラス50名を超えるような場合があり、その改善が求められている。また、集中講義による授業も多く、短期間で専門的な技術や指導法を身につけることが難しいため自己評価が低いことが推測される。このほか、陸上競技の授業を体育館や多目的グラウンドで実施しなくてはならないなどの場所の問題も影響していることが考えられる。早急な改善が必要である。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグループ化）の推移を表5に示した。

3. D3 「スポーツや運動の意味や価値について理解している」について

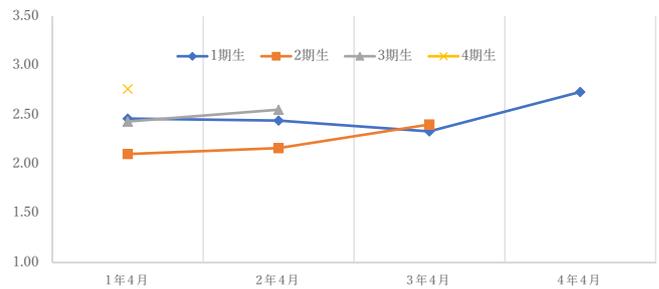


図4 D3 スポーツの社会的意味・価値・力を理解説明できる

D3に関する質問は「あなたはスポーツがもたらす社会的な意味や価値、スポーツの力について理解し、説明することができますか」というものである。図4は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。1期生の1年次から3年次にかけて自己評価ポイントが若干低下しているが、そのほかは緩やかに上昇している。主としてD3に紐づくことされている授業にはスポーツ倫理学、スポーツ史、スポーツ社会学などの人文社会科学系の授業や、保健体育科教育法など教職課程科目が多い。各学年に、履修する授業があり、学年進行とともに知識や技術が蓄積されているのではないかと推察される。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグループ化）の推移を表6に示した。

表6 DP3 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの 平均の推移	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
	1年	2年	3年		4年				
D3 スポーツがもたらす社 会的な意味や価値、ス ポーツの力について理 解し、説明できますか	1年	2.42	0.77		2年	2.46	0.66	325	n.s.
	1年	2.13	0.69		3年	2.40	0.58	134	↑**
	1年	2.49	0.86		4年	2.72	0.70	101	↑*
	2年	2.24	0.66		3年	2.32	0.48	25	n.s.
	2年	2.46	0.68		4年	2.73	0.68	99	↑**
3年	2.40	0.52		4年	2.80	0.79	10	n.s.	

4. D4「人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている」について

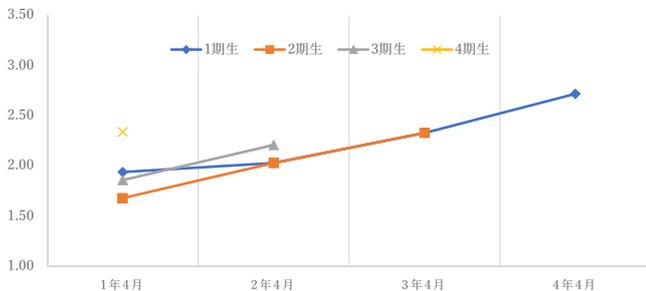


図5 D4 多様な人に発育発達段階に基づきスポーツ指導できる

D4に関する質問は「あなたは幼児や大人、高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができますか」というものである。図5は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。入学年次に関わらず学年を経るにしたがって自己評価ポイントが上がっている。主としてD4に紐づくとしてされている授業には、発育発達論、スポーツ栄養学、スポーツコミュニケーション、レクリエーション理論などがある。このほか、特別支援教育論、肢体不自由児指導法、特別支援教育概論、総合的な学習の時間の指導法など特別支援教育に関する教職課程科目がある。特別支援教育課程科目は一部の学生にとどまることから、現在カリキュラムマップに記載されている授業以外でもD4に影響している授業あるいは学内外の授業以外の様々な活動があることが推察される。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグループ化）の推移を表7に示した。

表7 DP4 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD	学年	平均	SD	n	有意差	
D4 人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができますか	1年	1.90	0.82	→	2年	2.10	0.69	324	↑**
	1年	1.67	0.70	→	3年	2.32	0.57	133	↑**
	1年	1.87	0.84	→	4年	2.72	0.68	102	↑**
	2年	2.00	0.59	→	3年	2.38	0.65	24	↑**
	2年	2.03	0.66	→	4年	2.73	0.67	99	↑**
	3年	2.20	0.63	→	4年	2.60	0.70	10	n.s.

5. D5「スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている」について

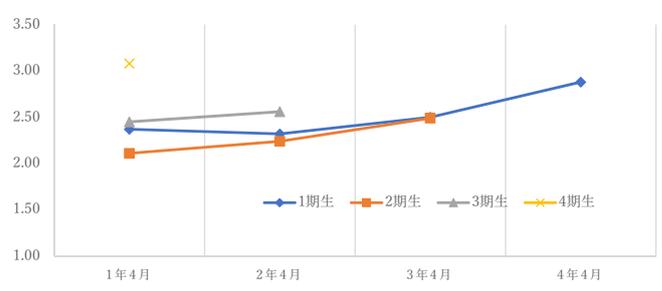


図6 D5 スポーツの力や影響力を伝えることができる

D5に関する質問は「あなたは人々のスポーツに対するニーズを理解したうえで、スポーツのやり方や楽しさ、スポーツの持つ様々な力や影響力を伝えることができますか」というものである。図6は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。入学年次に関わらず学年を経るにしたがって自己評価ポイントが上がっている。主としてD5に紐づくとしてされる授業は、2年次のスポーツフィールドワークのみである。しかしながら1年から2年、3年から4年にかけても自己評価ポイントは伸びていることから、カリキュラムマップのD5に記載以外の授業や学内外での課外活動の影響があるものと考えられる。現在、スポーツ指導演習系の授業等はカリキュラムマップのD5に紐づく授業とはなっていないがこれらの授業もD5に関連する授業と言えるかもしれない。先述したようにカリキュラムマップの修正も検討すべきであろう。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグループ化）の推移を表8に示した。

表8 DP5 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD	学年	平均	SD	n	有意差	
D5 スポーツのやり方や楽しむ、スポーツの持つ様々な力や影響力を伝えることができますか	1年	2.36	0.80	→	2年	2.41	0.67	324	n.s.
	1年	2.10	0.75	→	3年	2.49	0.62	134	↑**
	1年	2.25	0.76	→	4年	2.88	0.65	103	↑**
	2年	2.14	0.56	→	3年	2.18	0.40	22	n.s.
	2年	2.31	0.63	→	4年	2.88	0.63	98	↑**
	3年	2.60	0.70	→	4年	2.80	0.79	10	n.s.

6. D6 「地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている」について

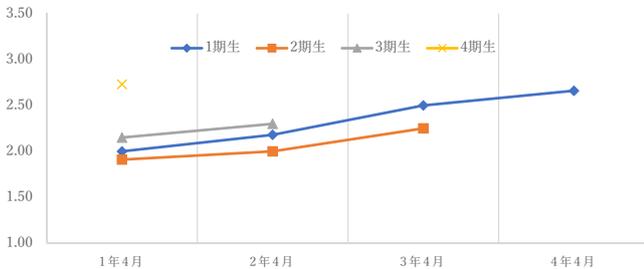


図7 D6 スポーツ大会や教室の企画運営ができる

D6に関する質問は「あなたはスポーツ大会や教室などの企画や運営をすることができますか」というものである。図7は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。入学年次に関わらず学年を経るにしたがって自己評価ポイントが上がっている。主としてD6に紐づくことされる授業は、スポーツ・運動指導者論、地域スポーツ論、衛生・公衆衛生学、学校保健B、コンディショニング演習、健康産業現場実習である。これらカリキュラムマップD6記載以外の授業（ふくしスポーツ演習など）や学内外での課外活動の影響があるものと考えられる。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグループ化）の推移を表9に示した。

表9 DP6 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD		学年	平均	SD	n	有意差
D6 あなたはスポーツ大会や教室などの企画や運営をすることができますか	1年	2.06	0.86	→	2年	2.22	0.74	326	↑**
	1年	1.90	0.85	→	3年	2.28	0.71	134	↑**
	1年	2.03	0.86	→	4年	2.67	0.72	103	↑**
	2年	1.96	0.84	→	3年	2.20	0.76	25	n.s.
	2年	2.23	0.77	→	4年	2.66	0.72	99	↑**
	3年	2.50	0.71	→	4年	2.70	0.68	10	n.s.

7. D7 『真実を見極める「知」への探求心を有している』について

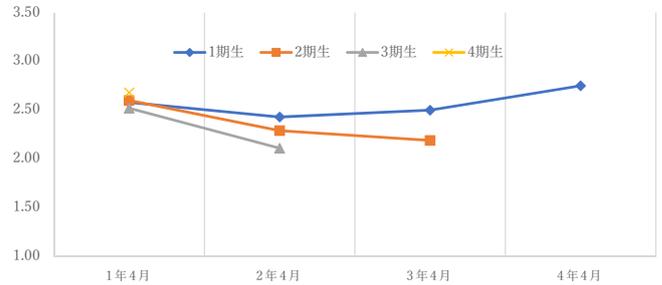


図8 D7 社会的問題や疑問について深く知ろうとしている

D7に関する質問は「あなたは様々な社会事象や問題、疑問に思ったことに対して、それを深く知ろうとする気持ちがありますか」というものである。図8は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。1期生の1年から2年にかけて、2期生の1年から3年にかけて、3期生の1年から2年にかけて自己評価ポイントが低下している。主としてD7に紐づくことされる授業は、導入ゼミ、スポーツ科学演習、専門演習、法入門、福祉社会入門、知多学、経営学、統計学、社会学、哲学、キャリア開発I、日本福祉大学の歴史、地震と減災社会、日本国憲法、生理学、政治学、福祉の力などである。学部基幹科目である導入ゼミ、スポーツ科学演習、専門演習以外の多くが基礎科目であり、これらの授業に対する本学部学生の関心の低さが表れているのかもしれない。また、これはアドミッション・ポリシーの「スポーツに関心があり、身につけた力を社会で活かす」という部分が高いことの裏返しとも言えるかもしれない。こうした科目の重要性を学生たちに認識させることが必要である。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均（入学年度に関係なく学年ごとにグ

表10 DP7 学年による自己評価の変化の推移 (対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD		学年	平均	SD	n	有意差
D7 様々な社会事象や問題、疑問に思ったことに対して、それを深く知ろうとする気持ちがありますか	1年	2.54	0.75	→	2年	2.30	0.66	325	↓**
	1年	2.67	0.74	→	3年	2.22	0.62	133	↓**
	1年	2.64	0.85	→	4年	2.75	0.68	103	n.s.
	2年	2.28	0.74	→	3年	2.20	0.50	25	n.s.
	2年	2.47	0.72	→	4年	2.75	0.68	99	↑**
	3年	2.60	0.70	→	4年	2.70	0.68	10	n.s.

ループ化)の推移を表10に示した。

8. D8 「国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている」について

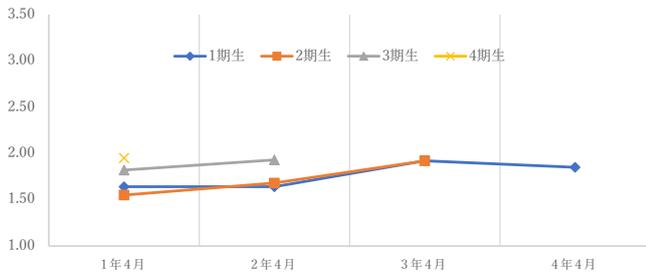


図9 D8 英語で自己紹介、英語論文を読むことができる

D8に関する質問は「あなたは英語を使って自己紹介や会話をしたり、スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができますか」というものである。図9は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。どの入学年度の学生も自己評価ポイントは横ばいと言える。また、他のディプロマ・ポリシーの自己評価ポイントと比べ主として約1.5から2.0と低いことが特徴である。D8に紐づくことされる授業は、フレッシュマンイングリッシュ、情報処理演習、海外フィールドワーク、スポーツキャリア教育、文章作成力演習、スポーツイングリッシュなど外国語系の科目が多い。必修授業として受けているにもかかわらず、自分の力となっていると実感できていないことが読み取れる。まずは語学に関心を持たせること、そして自己効力感が持てる方法を考える必要がある。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均(入学年度に関係なく学年ごとにグループ化)の推移を表11に示した。

表11 DP8 学年による自己評価の変化の推移(対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
D8 英語を使って自己紹介や会話をしたり、スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができますか	1年	1.69	1.38	→	2年	1.76	0.69	327	n.s.
	1年	1.61	1.87	→	3年	1.92	0.72	133	n.s.
	1年	1.61	0.70	→	4年	1.83	0.69	103	1*
	2年	1.56	0.71	→	3年	1.80	0.71	25	n.s.
	2年	1.68	0.60	→	4年	1.82	0.68	99	n.s.
	3年	1.90	0.74	→	4年	2.00	0.94	10	n.s.

9. D9 「他者と、スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている」について

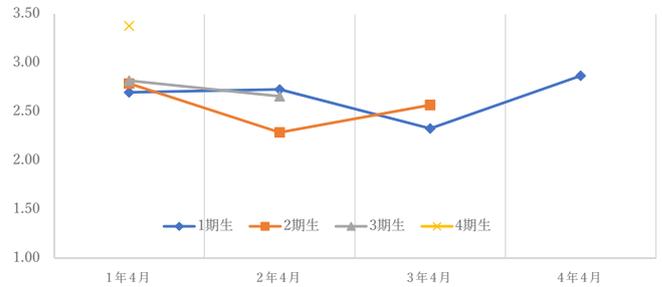


図10 D9 困っている人に寄り添い、支援できる

D9に関する質問は「あなたは様々な場面で困っている人を見たとき話を聞いたり、支援したりすることができますか」というものである。図10は入学年度別にその自己評価の平均の推移を示している。どの入学年度の学生も若干の上昇、下降はみられるものの、自己評価ポイントは横ばいと言ってよいのではないかとされる授業は、ここからからだ、視覚障害者支援論、ろう文化と手話、聴覚障害者の理解と支援、ふくしとフィールドワーク、日本語と文化I、II、ビジネススキル、コミュニケーション力演習、スポーツジェンダー論、日本語と文化III、IV、ふくしフィールドワーク実践、インターンシップである。福祉系の授業とコミュニケーション系の授業が多い。直接福祉に関心があって本学部に入學してくる学生は少ないと考えられること、アドミッション・ポリシーに関わる部分で、自己表現や意思疎通に関する評価ポイントが比較的低かったことなどがその要因として考えられる。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均(入学年度に関係なく学年ごとにグループ化)の推移を表12に示した。

表12 DP9 学年による自己評価の変化の推移(対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
D9 困っている人を見たとき話を聞いたり、支援したりすることができますか	1年	2.71	0.74	→	2年	2.67	0.68	326	n.s.
	1年	2.81	0.68	→	3年	2.54	0.76	134	1**
	1年	2.69	0.75	→	4年	2.86	0.76	103	n.s.
	2年	2.36	0.64	→	3年	2.32	0.56	25	n.s.
	2年	2.81	0.63	→	4年	2.86	0.76	99	n.s.
	3年	2.40	0.84	→	4年	2.70	0.95	10	n.s.

ループ化)の推移を表12に示した。

#### IV. 社会人力と体罰に関して

1. あなたは様々な場面で人と関わり、その集団がうまく機能するよう働きかけたり、調整することができますか？(社会人に求められる力)という質問に対して

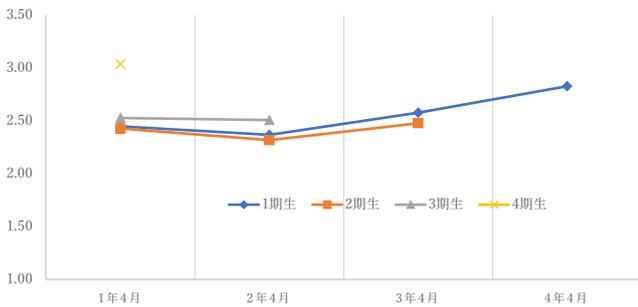


図11 社会人力

ディプロマ・ポリシーには記載されていないが、卒業後に備えて社会人力を養っておくことは重要である。これについてもディプロマ・ポリシーに関する質問と同様に本学部設置時から調査を行っている。質問内容は「あなたは様々な場面で人と関わり、その集団がうまく機能するよう働きかけたり、調整することができますか」というものである。図11は社会人力が身についたと思うかどうかについて入学年度別に見たものである。4期生を除くいずれの入学年度の学生においても2年次では自己評価ポイントが若干下がるもののその後は緩やかに上昇している。様々な授業や学内外での課外活動やアルバイトでの経験などにより、そうした力が身についたと実感しているのではないかと推察される。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均(入学年度に関係なく学年ごとにグ

表13 社会人力 学年による自己評価の変化の推移(対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
社会人としてのスキル	1年	2.47	0.73	→	2年	2.43	0.70	326	n.s.
	1年	2.40	0.66	→	3年	2.49	0.66	134	n.s.
	1年	2.43	0.78	→	4年	2.83	0.70	103	↑**
	2年	2.12	0.78	→	3年	2.36	0.49	25	n.s.
	2年	2.43	0.67	→	4年	2.83	0.69	99	↑**
	3年	2.60	0.52	→	4年	2.50	0.97	10	n.s.

ループ化)の推移を表13に示した。

2. あなたはスポーツ場面における体罰はある程度は仕方ないと思いますか？という質問に対してディプロマ・ポリシーの「3 スポーツや運動の意味や価値について理解している」や「5 スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている」、「9 他者と、スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている」に関連するものとして体罰にかかる質問も同様に行っている。質問内容は「あなたはスポーツ場面における体罰はある程度は仕方ないと思いますか」というものである。選択肢は「全くそうは思わない、思わない、強くそう思う」となっているため、この項目だけは評価ポイントが低いほうが好ましい。

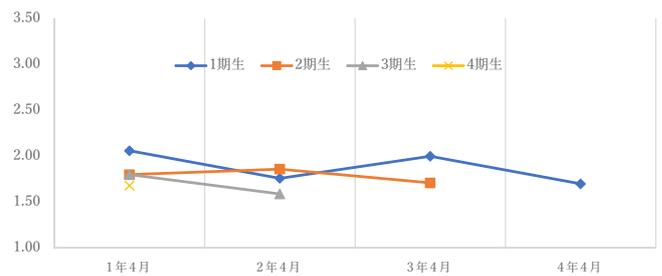


図12 体罰

図12はその結果を示している。1期生の2年から3年にかけて、2期生の1年から2年にかけて若干上昇しているが他は低下している。スポーツ倫理学、スポーツ教育論、スポーツ指導者論、スポーツ社会学など様々な授業や部活動での研修会などで体罰に関しては触れられており、こうしたことが影響しているものと推察される。

なお参考資料として、対応のあるサンプルとしての各学年の平均(入学年度に関係なく学年ごとにグ

表14 体罰に対する意識 学年による自己評価の変化の推移(対応のあるサンプルの平均)

対応のあるサンプルの平均の推移	学年	平均	SD	→	学年	平均	SD	n	有意差
体罰は仕方ない	1年	1.91	0.84	→	2年	1.69	0.79	324	↓**
	1年	1.78	0.71	→	3年	1.74	0.76	134	n.s.
	1年	1.93	0.89	→	4年	1.69	0.81	103	↓*
	2年	1.60	0.76	→	3年	1.92	0.86	25	n.s.
	2年	1.65	0.76	→	4年	1.69	0.80	99	n.s.
	3年	2.10	0.74	→	4年	2.40	0.70	10	n.s.

ループ化)の推移を表14に示した。

## V. おわりに

本学部は完成年度を迎え、学部教育の目的が達成されているかどうか問われる時期となっている。学部開設当初から実施してきた本調査もデータが蓄積されつつあり(2019年度の調査がうまく行われず回答者が少ないことは残念であるが)、学部教育の成果の推移が数ある指標の中の一つである、学生による自己評価によって示されつつある。

9つあるディプロマ・ポリシーのうち、D1「スポーツ文化を多角的視点(人文・社会・自然科学的視点)から理解している」、D3「スポーツや運動の意味や価値について理解している」について、D4「人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている」、D5「スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている」、D6「地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている」については多少、下降が見られる部分もあるがおおむね自己評価ポイントが上がってきていた。

D7『真実を見極める「知」への探求心を有している』、D8「国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている」については大きな変化は見られず、これまでのところ横ばいと言える。学生の関心をどう引き、必要な知識や技能が身につけさせるかを検討する必要がある。

D2「スポーツの楽しさを体験的に理解している」は下降傾向が見られ、早急に改善が必要である。おそらく、授業場所や受講人数などの影響が大きいと考えられる。大学へ改善を求めると同時に授業内容のより一層の充実を図ることなどが必要である。D9「他者と、スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている」に関しては自己評価の方向性がいまだ明確でないところもみられるため、今少し時間をかけて分析していく必要がある。

## 文献

- 安藤 佳代子・甲斐 久美代・竹村 瑞穂・藤田 紀昭(2019)「スポーツ科学部3ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告2018年度版」, 日本福祉大学スポーツ科学論集2, pp.71-80.
- 甲斐 久美代・安藤 佳代子・藤田 紀昭(2018)「スポーツ科学部3ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告2017年度版」, 日本福祉大学スポーツ科学論集1, pp.85-91.
- 甲斐 久美代・安藤 佳代子・竹村 瑞穂・藤田 紀昭(2020)「スポーツ科学部3ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告2019年度版」, 日本福祉大学スポーツ科学論集3, pp.57-64.